

保育者養成課程の学生による「保育者」カテゴリーの付与と引受

Researches of Application and Undertaking of Child Care Worker
Category by Child Care Training School's Student

中 田 奈 月

NAKATA Natsuki

保育者養成課程の学生による「保育者」カテゴリーの付与と引受

Researches of Application and Undertaking of Child Care Worker Category by Child Care Training School's Student

中 田 奈 月

NAKATA Natsuki

本稿の目的は、保育者養成課程の学生の社会的カテゴリーの変容をたどることである。保育者をめざす学生にとって、在学期間とはすなわち社会的カテゴリーを付与する側から引き受ける側へと立場を変える期間でもある。学生は保育者カテゴリーにどのような意味を付与して入学し、それが学びによってどう変化するのか、社会的カテゴリーの変化過程を質問紙調査から明らかにする。分析の結果、幼稚園教諭や保育士を目指す学生の保育者カテゴリーは、付与する側から引き受ける側へと変化するにしたがって大きく変化することが明らかになった。入学時、男女学生は「保育者」を「家事育児の代替者」ととらえたり「第二の家庭の父母」ととらえたりする。そのような意味づけをもたらすのは、年少時に幼稚園教諭や保育士に出会った経験、中学時代に保育所や幼稚園で行われた職場体験などであった。ところが卒業時には保育は家庭とは別のものとして認識される。また男性は性別を強調した保育を目指すようになった。

キーワード：社会的カテゴリー、保育者、ジェンダー、職業、保育者養成課程

Key Words: Social categories, Child care worker, Kindergarten teacher, Gender, Occupation,
Child care training school

1. はじめに

昨今の資格ブームや短期大学の四年制大学化の影響をうけて、保育士や幼稚園教諭を養成する保育者養成課程をもつ四年制大学が急速に増加している。それにともない保育者養成課程の男女共学化も急激に進み、保育者を目指す男子学生も増加傾向にある。数年前まで保育者養成課程を持つ大学や専門学校の多くが男性に門戸を閉ざしていたことからみて、この急激な変化は驚くに値する。この傾向は男性が保育職に従事することが社会的に容認されつつあることを示すといえよう。

保育者を目指す男子学生の増加は、性別職域分離を数の面からは是正するだけでなく、女性保育者や施設長、幼稚園長、子どもを預ける保護者、そして社会の持つ

保育者像をおおきく変化させることにつながる。では保育者養成課程に在籍する学生にとってはどうだろう。保育職にどのような意味を付与しているのか、そして養成課程での学びによってそれがどう変化するか。これまでの人々が持っている保育者カテゴリー——女性がほとんどを占める性別職域分離が発生しており、家庭における性別役割、なかでも母親役割に類似した仕事であり、女性の「こしかけ」的な職業で、完全専門職に劣る「準専門職」といった意味が付与されている職業カテゴリー——を、彼らは踏襲しているのか否か。男女共学の保育者養成課程の学生を対象に実施した質問紙調査から明らかにする。

2. 保育者カテゴリーの付与と引受

我々は他者と出会った時、他者を行為、振る舞い方などから解釈し、カテゴリー化する。我々が他者をカテゴリー化するのは、彼らを解釈可能である位置に秩序づけるためである (Goffman1961:2=1984: 11)。我々は秩序を見出す必要性を感じるものだけをカテゴリー化しようとする。さらに何に対してどの社会的カテゴリーを当てはめるかは、社会状況、文脈によってルールがあり、そのルールは社会が共有している (Burr 1995=1997; 加藤2001他)。カテゴリー化の結果、その社会的カテゴリーにはその社会的カテゴリーに特有とみなされる様々な特徴が付与される。カテゴリー化によって社会的カテゴリーに当てはめられた人々は様々な特徴を含めてそのカテゴリーにあうよう自らを統制させていく (中田2002a)。幼稚園教諭や保育士といった職業を社会的カテゴリーとして捉えた場合¹⁾、保育者養成校に学生が在籍している期間とはすなわち、社会的カテゴリーを付与する側から引き受ける側へと立場を変えつつある期間であると換言できる。保育者養成課程で学ぶ前に彼らが持つ社会的カテゴリーはそのまま世間の人々が持つ社会的な保育者カテゴリーと重なる。その社会的カテゴリーを引き受けていく変化の諸相を知ること、付与から引受への変化過程を探ることが可能だろう。

本稿では学生における保育者カテゴリーの変容をたどるにあたり、性差と専門性との関連性に着目したい。保育者カテゴリーには通常、女性という属性を持つ者が多数を占めること、いわゆる「母親役割」と類似する仕事であること、完全専門職に劣る準専門職であるといった意味が付与される (中田1999他)。これらの保育者カテゴリーを、保育者養成課程に在籍する学生はどうとらえているのか。男女共学の保育者養成課程において、学生は性別を感じることなく日々すごしているかもしれないが、学生時代の出来事が保育者カテゴリーと性別、専門性に関する意味付与について何らかの影響を与えていると考えられる。そこで学生における保育者カテゴリーの意味付与をたどる際に、性的属性と保育者カテゴリー、専門性との関係に着目して分析する。

以下、保育者カテゴリーの付与と引受について、入

学時の保育者カテゴリーと卒業時の保育者カテゴリーとを比較分析する。最初に保育者カテゴリーに影響を与える、保育職志望 (3.2)、職業と性別役割の有無 (3.3) について述べた後、保育者カテゴリーと性別との関連性とその変容について述べる (3.4)。その後、保育者カテゴリーと専門性との関連性とその変容 (3.5)、専門性との関係について分析する (3.6)。そして最後に、学生における保育者カテゴリーの付与と引受の関係性について論じる (4)。

3. 分析

3.1 調査の概要

本調査は幼稚園教諭と保育士を養成する課程に籍をおく男女共学の短期大学生2回生全員を対象に実施した質問紙調査である。大学卒業直前の2006年3月16日と2007年3月16日の2回で、集合自記式法で行った。2006年度は132通、2007年は142票配付し、合計197票回収した (回収率72%)。男性77名 (39.1%)、女性120名 (60.9%) である。今回対象にしたのは男女共学化してから6年目を迎える短期大学の学生である。筆者の調査によると保育職を目指す男性は短期大学より四年制大学や専門学校へ進学する傾向があるが (中田2002他)、今回対象にした短期大学は男子学生が多く、全体の4割程度を占める。調査対象者の96%が高校卒業直後に短期大学に入学し、全体の83%が在籍中に保育士資格と幼稚園教諭免許を取得する。どちらも取得しないで卒業する学生は5%未満である。就職者は6割、進学者は4割で、就職者全体のうち35%が保育所、10%が幼稚園、3%が児童福祉施設、12%が企業へ就職する。

3.2 保育職への志望

保育者養成課程に進学した学生の保育者カテゴリーへの意味付与を分析するにあってまず、彼らの意味付与に影響を与える保育者を目指す年齢やきっかけについて分析しよう。

最初に保育職を志望した年齢ときっかけ要因について分析したところ、志望年齢の平均値は13.51歳であり、男性は15.22歳、女性は12.41歳であった (図1)。男性よりも女性のほうが早い段階から保育職を目指す。最頻値をみると、女性では、15歳 (中学3年) と17歳

(高校2年)が多く、14歳(中学2年)と12歳(小学6年)が続いている。男性の場合は17歳(高校2年)に志望した者がもっとも多く、15歳(中学3年)と18歳(高校3年)、と続く。男女ともに進路選択時と保育職志望時とが重なっている。レンジをみると、男性は17歳、女性は22歳であり、どちらも幅広い。しかし度数をみると、男性に比して女性は早い時期からどの年齢においても保育職を目指す者がいる。女性にとって保育職が、年少時から「自分の目指す職業」として意味付与されていることが伺える。

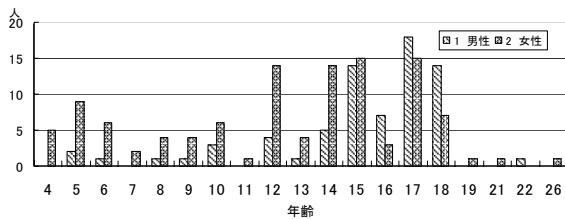


図1 保育職を目指した年齢

注目に値するのは小学校時代から保育職を目指していた男性がいることである。筆者が過去に実施した、現役男性保育者を対象にした調査では見られなかった傾向である(中田 2000, 2001他)。男性にとっても小学校時代から「自分の目指す職業」として意味付与されていることを示しているのではないか。彼らが生まれた頃には既に、幼稚園教諭や保育士(当時は保母)として男性が働く資格が存在していたこと、調査対象者の多くが12歳位の頃はちょうど、保母から保育士に名称変更された1999年にあたることから、施策の変更が保育者志望動機と保育者カテゴリーになんらかの影響を与えたといえる。

次に幼稚園教諭や保育士を目指したきっかけをみていこう。女性では幼稚園や保育所における「保育者との出会い」、男性では「子どもと関わる経験」が圧倒的に多い(図2)。「保育者との出会い」について具体的に聞いたところ、年少時に幼稚園教諭や保育士との出会ったときから保育者を目指そうと思った者がいたほか、進路決定時期に年少時の直接的な出会いを思い出してという意見もあった。過去、男性は年少時に幼稚園教諭や保育士といった保育者との出会いがあっ

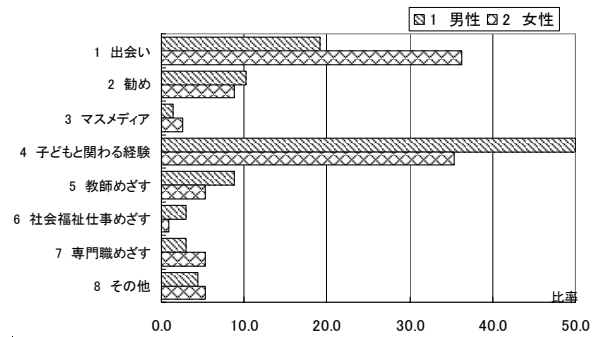


図2 保育職を目指したきっかけ (%)

も保育者を志望することはなかった(中田2000)。今回の調査対象者である男性にしても、年少時代に男性保育者と出会った者はいない。それにもかかわらず保育者との出会いがきっかけ要因になるのは、保育者に出会った時は既に自分が引き受けられる社会的カテゴリーであると認識されつつあるからだと考えられる。

「子どもと関わる経験」の内容をみると、中学時代の職業体験での経験、弟や近所の子どもを面倒をみた経験が多く挙げられた。1998年から兵庫県から始まった職業体験教育事業は全国に広がっており、この取り組みは将来に従事する職業に対する意識を高めるだけでなく、自分自身の進路を決定するため大きな効果を持つとされる。保育職志望においてもこの経験が大きく影響を及ぼしていることが明らかになった。

3.3 保育者と性別

保育者養成課程に在籍する学生の性別が実習や就職活動になんらかの影響を与えたか否か。保育者と性別役割について、全体の60%が、保育には男女で役割の違いがあると答えた(男女で役割の違いはある:58.6%

男女で役割の違いはない:41.4%)。女性よりも男性のほうが「男女で役割の違いがある」と答える者が多い(図3)。女性の場合は「男女で役割の違いがある」「男女で役割の違いはない」と答える者はともに半数であるのに対し、男性の7割近くが「男女で役割の違いがある」と答えている。

彼らがジェンダーフリー教育を受けてきた世代であることをあわせみると、男女で役割の違いはあると答えた者の比率は相当高いといえるかもしれない。しか

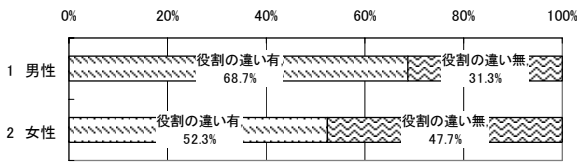


図3 保育と性別役割

しこの意識は学生時代の経験が影響を与えている。これについては後述しよう。

次に、実習や就職活動は性別を意識させることになっているのか否かをみていこう。筆者の過去の研究によると、保育者を目指す男性は、保育職は女性が多数を占める職業であることを実感として持っていない。実習や保育現場で女性が多数を占めることを目の当たりにはじめて性別と保育との関係性を問うことになる(中田2002a)。そこで実習中に性別を理由に異性とは異なる仕事を任された仕事があったか否かをたずねたところ、男性の4人に一人が性別を理由に女性とは異なる仕事を任されていることが分かった(男性:25.9%) (表1)。異なる仕事の内容として、力仕事や屋外での遊び等が挙げられた。女性の場合、男性とは異なる仕事を任されたのは全体の6%である。「実習先に男子学生がいたために彼が屋外での遊びの担当になった。女性である自分は教室で折り紙をしたり絵本を読んだりする担当になり、屋外で遊びができなかった」「作品展のために男子学生と同じように作品を運んだりしたが、男子学生のほうが評価された」などが挙げられ、男性実習生の存在が女性の実習生の実習内容に影響を与えていることが分かった。実習園では男子学生の存在が女子学生の役割を制限するといえよう。

次に就職活動について、自分の性的属性が就職活動に有利に働いたかたずねたところ、女性より男性のほうが性的属性が有利、または不利に働いたと感じる者が多かった(表2)。自由回答をみると「性別は有利に

働いた」では「就職試験の時に男性を採用したいと言われて受験」「男性は男性の保育を期待するといわれた」等、「性別は不利に働いた」は「男子の実習生はひきうけるが採用しないと実習中に言われた」「男性の採用試験はないと聞いた」等があった。

保育者養成課程の学生の保育者カテゴリーに影響を与えるものについて論じた。学生は男女とも早い時期から保育職への従事を目指す者が多く、保育者志望年齢や志望動機の男女差は縮まっていること、しかしながら実習や就職活動時に、男性は性的属性を意識せざるをえなくなることを論じた。それは、実習先や就職先の幼稚園や保育所が男性を、女性とは異なる存在として認識していることによる。彼らは保育の現場に出ではじめて、学生が自ら付与していた保育者カテゴリーと自らが引き受ける保育者カテゴリーとの齟齬を実感することになる。それでは具体的に、彼らの保育者カテゴリーは入学時と卒業時とでどのように異なるのか、次節で論じよう。

3.4 入学時と卒業時の保育者カテゴリー

保育者養成課程の学生は保育者カテゴリーにどのような意味を付与しているのか。それは入学時と卒業時とでどのように変化するのか。筆者は先行研究や保育者へのインタビューから、保育者が「保育」に付与する4タイプ、「家事育児の代替」、「第二の家庭の父母」、「男性あるいは女性の視点の強調」そして「男女同一の養護・教育」を析出している。このタイプは2軸——保育の場と家庭とを同一視するか否か、ジェンダーを帯びているか否か——にもとづいて構成される(中田2002b)。そこで、保育者養成課程に在籍する学生についても同じタイプが析出されると仮定して分析を進める。ただしこの4タイプは「保育」に対する意味付与を扱ったもので、保育者が現場で実際に遂行する

表1 実習生の性別を理由に任された仕事 (%)

	男性	女性	全体
異なる仕事を任された	25.9	5.8	12.7
異なる仕事は任されなかった	74.1	94.2	87.3
合計	100.0	100.0	100.0

表2 就職活動と性別 (%)

	男性	女性	全体
性別は有利に働いた	19.2	13.5	15.4
有利でも不利でもない	65.4	78.9	74.4
性別は不利に働いた	15.4	7.7	10.3
合計	100.0	100.0	100.0

職務とは異なることをあらかじめ指摘しておく。

調査では「あなたの現在の理想の保育者像は以下のどれですか」「入学当初に考えていた理想の保育者はどうのようなものでしたか」と設問し、「家庭で行う家事育児を、親の代わりにする（家事育児の代替）」「第二の家庭として保育の場を位置づけ、子どもや利用者の父親や母親としてかかわる（第二の家庭の父母）」「女性であろうと男性であろうとかかわりなく、子どもや利用者の、教育や養護、生活支援をする（男女同一の養護・教育）」「特に女性の視点をとりいれ、子どもや利用者の、教育や養護、生活支援をする（女性の視点の強調）」「特に男性の視点をとりいれ、子どもや利用者の、教育や養護、生活支援をする（男性の視点の強調）」の回答選択肢を用意して択一選択技法で回答してもらった。ただし「入学当初に考えていた保育の理想」を問う設問に「その他」を選んだ者がおり、全てが「技術や知識のいらぬ仕事」「頭ではなく体でぶつかる仕事」「子どもと遊ぶだけの楽な仕事」といった回答であった。そこで選択肢を新たに設け、これらを「技術や知識不要の仕事・楽な仕事」とした。

最初に卒業時に付与する保育者カテゴリーをみる。調査の結果、半数が「男女同一の保育」と答えている。「第二の家庭の父母」と答えた者も4割近くあった（表3）。

男女で大きく異なるのは、男性の20%が「男性の視点の強調」と答えるのに対し、「女性の視点の強調」と答えた女性は極端に少ないことである。先に、保育職と性的役割分業とを結びつけて考えているのは男性

であると論じたが、この結果からも男性が性別を意識した保育をしていることが明らかになった。ただし女性がまったく意識しないと結論づけることは誤りである。保育者に付与されている社会的カテゴリー自体に「女性性」が付与されているために意識する必要がないことを付け加えておく。

それでは入学当初はどうか。入学当初の保育者カテゴリーについて設問したところ、「家事育児の代替」、「男女同一の養護・教育」、「第二の家庭の父母」はそれぞれ30%程度であり差はほとんどない（表4）。男女別にみると、女性でもっとも比率が高いのは「第二の家庭の父母」で、「家事育児の代替」や「男女同一の養護・教育」は同程度であった。男性の場合、比率がもっとも高いのは「家事育児の代替」であった。保育士は過去、「保母」という名称であったことから「保育者」と「母親」とを結びつけるのは容易であり、このことが「第二の家庭の父母」を女性に選ばせたといえるのではないか。それに比べて男性は、入学時に「第二の家庭の父母」を選ぶ者は少ないのは、男性は女性よりも「父親」と「保育者」とを結びつける者が少ないことを示す。男性にとって保育者は「母親」よりもむしろ「家事育児分担者」に大きくひきつけられている。

入学時と卒業時とで比較しよう。もっとも差が大きく出た「家事育児の代替」は、入学時に比して卒業時には極端に少なくなる（入学時:31.9% 現在:6.1%）。残りの全ての項目は卒業時のほうが入学時より高くなっ

表4 入学時の保育者カテゴリー（%）

	男性	女性	全体
家庭で行う家事育児を、親の代わりにする	35.2	29.7	31.9
第二の家庭として保育の場を位置づけ父母としてかかわる	16.9	36.0	28.6
性別にこだわらず男女同一の教育や養護、生活支援をする	32.4	30.6	31.3
女性の視点をとりいれ、教育や養護、生活支援をする	0.0	1.8	1.1
男性の視点をとりいれ教育や養護、生活支援をする	9.9	0.0	3.8
技術や知識不要の仕事・楽な仕事	5.6	1.8	3.3
合計	100.0	100.0	100.0

表3 卒業時の保育者カテゴリー（%）

	男性	女性	全体
家庭で行う家事育児を、親の代わりにする	2.9	8.1	6.1
第二の家庭として保育の場を位置づけ父母としてかかわる	33.3	39.6	37.2
性別にこだわらず男女同一の教育や養護、生活支援をする	43.5	47.7	46.1
女性の視点をとりいれ、教育や養護、生活支援をする	0.0	4.5	2.8
男性の視点をとりいれ教育や養護、生活支援をする	20.3	0.0	7.8
合計	100.0	100.0	100.0

ている。卒業時において保育職は家事育児の代替とは別のものとして意味づけられていることが分かる。

男女で比較すると、入学時と卒業時とで変化の度合いが大きいのは男性である。「保育を第2の家庭とみなし、第2の父親・母親になる」とした者は、入学時は16.9%だったのが卒業時は33.3%、入学時より16.4%上昇する。「男性の視点をとりにれ教育や養護、生活支援をする」も、入学時の9.9%から卒業時は20.3%になり、10.4%の上昇がみられる。いずれの選択肢も性的属性と保育との関連性を意識した項目であり、男性は性的属性を意識した保育者カテゴリに変化するといえるのではないか。

では性的属性を意識した保育者カテゴリとは具体的に何か。家庭への同一視と性差の強調に着目して、あらためて分析しよう。表3、表4で使用した選択肢を、二つの軸、すなわち保育の場と家庭とを同一視するか否か、性差が強調されているか否かに分けて作成したのが表5である²⁾。全体をみると、保育と家庭との同一視に関する項目も、保育と性差に関する項目も、入学時と卒業時とで比率が逆転していることが分かった(表5)。入学時に比率が高いのは保育と家庭とを同一視している項目で、卒業時には同一視しない項目のほうが高くなる。性差については、入学時は性差を協調しないのが65%ほどであるのに対し、卒業時にはその項目が5割程度になる。

男女別に比較する。入学時においては女性のほうが保育と家庭とを同一視してとらえており、その傾向は卒業時でも変わらない。他方「性差の強調」について、入学時は女性のほうが保育に性差を強調しているのに対して、卒業時には男性のほうが性差を強調した保育をめざすようになっており、比率が逆転していること

表5 保育者カテゴリと家庭・性別 (%)

	入学時			卒業時		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
保育=家庭	50.7	65.8	59.9	36.2	47.7	43.3
保育=否家庭	49.3	34.2	40.1	63.8	52.3	56.7
性差の強調	28.2	37.8	34.1	53.6	44.1	47.8
性差の非強調	71.8	62.2	68.9	46.4	55.9	52.2

が分かった。

以上、入学時と卒業時の保育者カテゴリを比較分析した。入学時と卒業時では保育者カテゴリに付与される意味づけは大きく異なる。入学時、学生にとって保育者カテゴリは家庭と結びついており、性別はそれほど強調されていない。この傾向は女性ほど強い。世間の人々にとっても保育者カテゴリは家庭と結びついていることがわかる。他方、卒業時をみると保育は家庭ではなく家庭とは別のものとして認識される。性差についてみると、性差を強調しない保育を理想としていた男性の志向が、卒業時には逆転していることが分かった。

3.5 保育者カテゴリの変容

保育者養成課程に在籍する男女学生の保育者カテゴリに対する性別への意味付与は、入学時と卒業時とで大きく異なる。では保育者カテゴリは入学時と卒業時とでどれほど変化したのか、何がどのように変化したのか。詳細にみていこう。

最初に変化の有無を調べたところ(表6)、変化した者は全体の55.6%であり、女性より男性のほうが変化していた(男性:68.%, 女性:47.7%)。変化のパターンを表したのが表7である。最初に変化がなかった者についてみていこう。もっとも多いのは「男女同一の養護・教育」で、次に「第二の家庭の父母」と続く。「第二の家庭の父母」は、男性より女性のほうが「変化しない」者が多い(男性:10.1%, 女性:21.6%)。

「変化あり」の項目でもっとも比率が高いのは「家事育児の代替」から「第二の家庭の父母」への変化、次に多いのが「家事育児の代替」から「男女同一の養護・教育」への変化であった。男性は「家事育児の代替」から「男女同一の養護・教育」への変化がもっとも多く、女性は「家事育児の代替」から「男女同一の養護・教育」への変化(12.6%)と「第二の家庭の父母」から

表6 保育者カテゴリの変化の有無 (%)

	男性	女性	全体
変化なし	31.9	52.3	44.4
変化あり	68.1	47.7	55.6
合計	100.0	100.0	100.0

「男女同一の養護・教育」が多かった（12.6%）。

各項目別にみよう。入学時には「家事育児の代替」と意味づけていた者が卒業時に別の社会的カテゴリーに変化した者のうちもっとも多いのは「男女同一の養護・教育」（12.2%）で、次に「第二の家庭の父母」（11.1%）が続く。「男女同一の養護・教育」に変化する者は男性に多く、「第二の家庭の父母」に変化する者は女性に多いことが分かった。次に、入学時に「第二の家庭の父母」を選んだ者の変化についてみると、もっとも多いのが「男女同一の養護・教育」であった。注目に値するのは、男性のうち「男性の視点の強調」に変化した者が7.2%存在することである。この比率は「男性」で「変化あり」の比率のうち、2番目に高い数値である。これとは逆に「男性の視点の強調」から「男女同一の養護・保育」に変化した者は4.2%にすぎなかった。

では入学時と卒業時とで保育者カテゴリーが変化したのはなぜか。変化のきっかけ要因についてたずねたところ、圧倒的に多いのは実習での経験であった（表8）。もっとも多いのは保育所の実習（77.4%）で、以下、幼稚園教育実習（67.0%）、保育所以外の児童福祉施設での保育実習（33.0%）と続く。男女で比較すると男性より女性のほうが「保育所以外の児童福祉施設での保育実習」が保育者カテゴリーの変化をもたらしていることが分かった。

保育実習や幼稚園教育実習は、実習での学びもさることながら先輩の保育を間近に感じ、将来の自分の姿を確認する場であると同時に、実習は保育者カテゴリーを構築する場であるといえる。現場での経験によって男女学生の性差が強調されるのは、学生の性別が実習や就職活動での経験を通して、保育者カテゴリーにおいてもなんらかの作用をしていることがもたらしていると考えられる。

表7 変化の諸相

	保育者カテゴリー		男性	女性	全体
	入学時	卒業時	%	%	%
変化なし	家事育児代替	→家事育児代替	1.4	6.3	4.4
	第二の家庭の父母	→第二の家庭の父母	10.1	21.6	17.2
	男女同一の養護・教育	→男女同一の養護・保育	17.4	23.4	21.1
	女性の視点	→女性の視点	0.0	0.0	0.0
	男性の視点	→男性の視点	2.9	0.0	1.1
変化あり	家事育児代替	→第二の家庭の父母	8.7	12.6	11.1
	家事育児代替	→男女同一の養護・保育	15.9	9.9	12.2
	家事育児代替	→女性の視点	1.4	0.9	1.1
	家事育児代替	→男性の視点	5.8	0.0	2.2
	第二の家庭の父母	→家事育児代替	0.0	0.9	0.6
	第二の家庭の父母	→男女同一の養護・保育	5.8	12.6	10.0
	第二の家庭の父母	→女性の視点	0.0	0.9	0.6
	第二の家庭の父母	→男性の視点	1.4	0.0	0.6
	男女同一の養護・教育	→家事育児代替	1.4	0.9	1.1
	男女同一の養護・教育	→第二の家庭の父母	5.8	4.5	5.0
	男女同一の養護・教育	→女性の視点	0.0	0.9	0.6
	男女同一の養護・教育	→男性の視点	7.2	0.9	3.3
	女性の視点	→第二の家庭の父母	0.0	0.9	0.6
	男性の視点	→第二の家庭の父母	4.3	0.0	1.7
	男性の視点	→男女同一の養護・保育	4.3	0.0	1.7
技術不要の仕事	→第二の家庭の父母	4.3	0.0	1.7	
技術不要の仕事	→男女同一の養護・保育	0.0	1.8	1.1	
技術不要の仕事	→男性の視点	1.4	0.0	0.6	

3.6 職業カテゴリーと専門性

保育者カテゴリーには性別のほか、専門性に関する意味づけも付与される（中田2001）。具体的には、女性の「こしかけ」的な職業で、完全専門職に劣る「準専門職」といった意味である。これらの意味づけについて、男女学生はどのようにとらえているのか。学生が現在理想とする職業継続形態について述べる。調査結果によると、女性と男性とで職業継続意識が大きく異なることが分かった（表9）。定年まで保育職を継続すると答えた者は、男性が66%であるのに対して女性は1割である。男性の多くが保育職を一生涯の仕事としているが、女性の場合、全体の75.5%が結婚や第一子誕生を機に退職することを考えている。女性全体の60.4%が結婚や出産を機に再就職する、いわゆるM字型労働形態を選択していることが分かった。それとは別に、男性の3割程度が結婚や第一子誕生を機に、賃金が高く労働条件のよい別の仕事へ従事することを考えていた。

表8 カテゴリー変化のきっかけ（複数回答）

（パーセンテージは応答者数を基に計算）

きっかけ内容	男性	女性	全体
幼稚園教育実習	70.8	64.2	67.0
保育所保育実習	72.9	80.6	77.4
保育所以外の児童福祉施設での保育実習	20.8	41.8	33.0
大学での授業	20.8	22.4	21.7
クラブ・サークル・ボランティア活動	2.1	1.5	1.7
友人や先輩、教職員の助言	8.4	16.5	13.0
就職活動	4.2	0.0	1.7
その他	2.1	1.5	1.7

保育者は女性の「こしかけ的」といった意味が付与されている。今回の結果でも、女性の多くは、在籍時からM字型労働を選択しようとしており、文字通り「こしかけ的」に保育職に従事しようとしていることが分かった。しかし男性の7割は、保育職を「こしかけ」ではなく、生涯にわたって従事する職業と考えている。もし彼らが生涯を通じて職業継続をするのなら、保育職カテゴリーの転換にも大きく寄与することになるだろう。その一方で結婚や第一子誕生を機に別の好条件の仕事への従事を考える男性もおり、ある意味で「こしかけ」的にとらえているともいえる。これは、保育職の給与体系への不安がこの結果をもたらすと推測できる。

表9 理想とする職業継続形態（％）

	男性	女性	全体
卒業→就職→定年まで仕事を続ける	65.8	11.3	34.1
卒業→就職→結婚・第一子誕生を機に退職→別の職業に転職	27.6	7.5	14.8
卒業→就職→結婚を機に退職→おちついたら再就職	0.0	28.3	16.5
卒業→就職→第一子誕生を機に退職→おちついたら再就職	0.0	32.1	18.7
卒業→就職→結婚や出産を機に退職、家族従事者になる	0.0	15.1	10.4
卒業→就職→結婚はしないで定年まで仕事を続ける	5.3	0.0	2.2
卒業→結婚・第一子誕生→生活がおちついた後に就職	0.0	5.7	3.3
その他	5.3	0.0	2.2
合計	100.0	100.0	100.0

以上、職業継続の形態について分析した。女性においては社会的な意味付与とそれほど違いがなくM字型就労を選ぶ者が多い。男性は生涯従事する職業ととらえる者が7割を占めるが、3割は保育職を、女性とは異なる理由ではあるが、「こしかけ」的にとらえている。

では、保育職が、女性にとって「こしかけ」的職業、男性にとって生涯働く職業であるとして、学生はその職業を専門職として認識しているのか。調査の結果、8割の学生が保育職を「専門職」として認識していることが分かった（表10）。入学時には専門職としてとらえていない者が2割程度存在するが、卒業時には96％が保育職を専門職とみなしていた。

通常、専門職は、威信の高さ、高収入、自律性、公共性、知識体系の独占といった特徴をもち、公共性は高いものの他の項目がこれらの基準に見合わないのが準専門職と考えられる（中田2002）。この定義からみると保育職は、日本においても欧米においても伝統的に準専門職と位置づけられ、給与は低く抑えられ社会的威信が低く、世間的にみれば「結婚まで・出産までのこしかけ的職業」である。そのような社会的な意識が、入学時の学生に対して保育者カテゴリーに「非専門職」と意味づけを与えさせたといえる。しかしながら卒業時、自らが保育者カテゴリーを引き受ける側になったときにはほとんどの学生が保育職を専門職として認識する。保育職をめざす学生にとって保育職は、たとえ「こしかけ的職業」ではあっても専門職として位置づけられていることが分かった。

4. 保育者カテゴリーの付与と引受

保育者養成課程の男女学生における保育者カテゴリーについて、入学時と卒業時を比較分析した。保育職には、女性がほとんどを占める性別職域分離が発生して

表10 専門職意識とその変化（％）

入学時	卒業時	男性	女性	全体
非専門職	→専門職	21.6	16.7	18.8
専門職	→専門職	75.7	81.3	78.8
専門職	→非専門職	2.7	0.0	1.2
非専門職	→非専門職	0.0	2.1	1.2
合計		100.0	100.0	100.0

おり、家庭における性別役割、なかでも母親役割に類似した仕事であり、女性の「こしかけ」的な職業で、完全専門職に劣る「準専門職」といった意味が付与されているが、幼稚園教諭や保育士を目指す学生の保育者カテゴリーは、付与する側から引き受ける側へと変化するにはがって大きく変化することが明らかになった。

入学時、男女学生は「保育者」を「家庭」と結び付けて解釈しており「保育者」を「家事育児の代替者」ととらえたり「第二の家庭の父母」ととらえたりする。そのような意味づけをもたらすのは、年少時に幼稚園教諭や保育士に出会った経験、中学時代に保育所や幼稚園で行われた職場体験などであり、それらの経験や保育者志望年齢の男女差は少なくなっていることが明らかになった。

卒業時、保育は家庭とは別のものとして認識される。また男性にかぎって性差を強調しない保育を理想としていた男性の志向が卒業時には逆転しており、男性と女性とで保育者カテゴリーに大きな違いが生じていることが明らかになった。

変化にもっとも大きな影響を与えるのは、実習や就職活動などによる、現場の保育所・幼稚園での体験である。現場での経験は男女学生に、保育職の専門性に対する意識を高めさせる。加えて男性は現場での経験により、初めて自分の性的属性を意識し、保育現場の期待にこたえられるよう、性別にそれにふさわしい保育を模索するようになる。

現場にふれただけで実際にはまだ現場に入っているわけではない学生にとって保育者カテゴリーはいまだ想像の域を脱していない。卒業時に付与した社会的カテゴリーを実際には引き受けているわけではなく、実際に保育者カテゴリーを引き受けたとき、さらに大きく変容することになる。男性の比率が急速に高まりつつある保育現場に入っていく男女学生の保育者カテゴリーは、保育現場に入った後どのように変化するのか、その分析は今後の課題としたい。

なお、本研究の一部は平成19年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助・学術研究高度化推進経費（共同研究代表 大石 正）を使用して行われた

ことを付記する。

注

- 1) 職業をカテゴリーとして捉えることを示唆したのはHughesである。「職業」は「地位」や「役割」で捉えられることが多いが、Hughesは「職業」には他の要素も含まれるとして「社会的カテゴリー」の概念を持ち出した。職業に従事した人の印象や職業に与えられた社会的な特徴といったものも含んで「職業」を捉えることを可能にした (Hughes, E., 1984:141-143)。
- 2) 保育と家庭との同一視に関する項目は「家庭で行う家事育児を、親の代わりにする」「第二の家庭として保育の場を位置づけ、子どもや利用者の父親や母親としてかかわる」の項目である。また、性差が強調される項目は、「第二の家庭として保育の場を位置づけ、子どもや利用者の父親や母親としてかかわる」「特に女性の視点をとりいれ、子どもや利用者の、教育や養護、生活支援をする」「特に男性の視点をとりいれ、子どもや利用者の、教育や養護、生活支援をする」の項目である。

文献

- Burr, V. (1995) an Introduction to Social Constructionism, London: Routledge. (=1997, 田中一彦訳「社会的構築主義への招待——言説分析とは何か」川島書店)
- Goffman, E.(1961) Asylums : essays on the social situation of mental patients and other inmates, Doubleday Books. (=1984, 石黒毅訳「アサイラム」誠信書房)
- Hughes, E. (1984) The Sociological Eye, Transaction Book.
- 中田奈月 (1999) 性別職域分離とその統合——男性保育従事者の事例から、奈良女子大学社会学論集, 6, 285-296.
- 中田奈月 (2000) 男性保育者のライフコース——キャリアの実態を通して、奈良女子大学社会学論集, 7, 67-78.
- 中田奈月 (2001) 男性保育者のライフコース——コー

- ホート分析, 奈良女子大学社会学論集, 8, 51-68.
- 中田奈月 (2002a) ライフコースとキャリアの再検討, 奈良女子大学社会学論集, 9, 75-92.
- 中田奈月 (2002b) 『男性保育者』の創出——男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響, 保育学研究, 日本保育学会, 40, 2, 8-16.
- 中田奈月 (2004) 男性保育者による『保育者』定義のシークエンス, 家族社会学研究, 日本家族社会学会, 41-51.
- Sacks, H. (1972) "On the Analyzability of Stories by Children." In Gumpertz, J. and Hymes, D, editors, Directions in Sociolinguistics, New York: Holt, Rinehart and Winston, 325-345.
- West, C. and Zimmerman, D. (1987) "Doing gender", Gender and Society 1, 373-87.